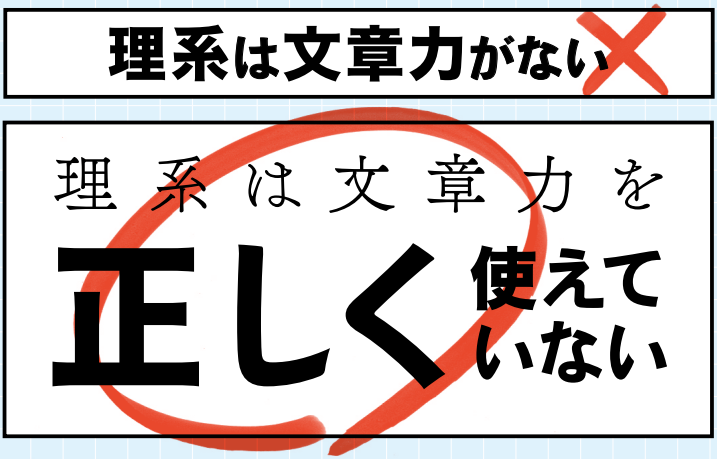
理系のための文章教室

もう「読みにくい」とは言わせない！

藍月要



理系のための文章教室

もう「読みにくい」とは言わせない！

藍月要

星海社

161

SEIKAISHA SHINSHO

はじめに

どれだけしっかり考えて書いても、「読みにくい」「わかりづらい」と言われてしまう。もう嫌になる、どうせ理系の人間には文章力がないんだ――。

なんて思っていませんか？

それは、大いなる誤解です。

理系の人間が持つ文章力は、決して低くありません。**使い方を間違えているだけ**です。

わたしは、高専（高等専門学校）で電気・情報分野を学び、大学の工学部と大学院の工学研究科にも進学した、バリバリの理系人間です。

一方で、現在は作家（ライトノベル作家）として活動しています。また、フリーランスの広報として、ＩＴ企業でプレスリリースやオウンドメディアの記事を書いてもいます。どちらも、文章を書くことが職務のいちばん中心にあるお仕事です。

作家として出した一冊目は、「読みにくい」と言われまくりました。理系の世界で育ったわたしが、そこで得た技術と倫理で精いっぱい書いた文章は、世間的にはクセの強い悪文だったのです。もちろんあの本は、愛してやまないわたしの誇りのひとつですし、好きだと言ってくださった読者の方々もたくさんいます。ですが、それはそれとして、多くの人にとって読みにくい文章であったことは、受け止めなくてはなりませんでした。

どうすればいいのか考えて考えて、いろんなことを変えました。その甲斐あって今では、書いたものについて、「読みやすい」とのお声をいただくことがほとんどになりました。

いかにも理系っぽい、読みにくい文章の書き手であった人間が、商業出版のエンタメ世界で血を吐きながら身につけた、読みやすさのための技術。

この本では、それらを、あしたから使えるレベルでスッキリまとめてご紹介します。もうちょっと人に伝わる文章を書きたい……そんなことを願う理系のあなたに、ぜひお伝えしたいテクニックの数々です。

あなたの文章って読みやすいよね——そう言われる自分になりませんか？

目次

はじめに 3

1章 文系社会における**理系の境遇** 11

1. 文系理系の割合から見る現代社会の構造 12
2. 理系の生きにくさの実態 14
3. 理系の文章と、世の中の意識の、本質的なすれ違い 18
4. 理系界隈にただよう、文章力への諦め 22
5. 理系が『理解しやすい文章』を書けるようになると得られる、新しい道 25

2章 理系の文章、**一文が長すぎる問題** 29

1. 一文が長いと理解しにくい 30
2. どうして理系は一文が長い文章を書いてしまうのか 33
3. 長い文章かどうか判断するための目安 37
4. 今こそ学ぼう、読点の使い方 41

4・1 セオリーその1：要因と結果の間に打つ 41
4・2 セオリーその2：長くなった主語の後ろに打つ 46
4・3 セオリーその3：述語と離れている主語の後ろに打つ 50
4・4 セオリーその4：長くなった目的語の後ろに打つ 51
4・5 セオリーその5：述語と離れている目的語の後ろに打つ 55
4・6 セオリーその6〜9を一挙紹介！ 57
4・7 ここまでのおさらい 60
4・8 表現のための読点：読点一個で印象がここまで変わる！ 61

3章 理系の文章、**字面の圧が高すぎる問題** 65

1. 『字面の圧が高い』とは 66
2. 理系は漢字を使いがち 69
3. 漢字を使うというコスト 74
4. 漢字の開き方 77

4-1 開くことを強くオススメする言葉たち 77
4-2 開くことをオススメする言葉 80
4-3 開いてみてもおもしろいかも、な言葉たち 86
4-4 大切な考え方と、とっても便利なツールについて 88

4-9 一文に読点4個は『長すぎる文章』 63

4章 理系の文章、**なんか冷たいと言われてしまう問題** 93

1. 冷たいと言われがちな理系の悲しさ 94
2. 理系の責任感は、他の文化圏からは無責任に見える？ 98
3. 正確さのために言葉を足すのは、はたしていつでも正しいことか 102

5章 もっと「読みやすい」と言われるための **中級編テクニック集** 109

1. これまでの章との違い 110
2. 受動態より能動態 112
3. 文の視点に気を配ろう 122
4. 一文一意の注意点 129

6章 一目置かれよう！ 上級編テクニック集 135

1. これまでの章との違い 136
2. 同じ文末が続くのを避けよう 138
2-1 ます↓です変換、です↓ます変換 139
2-2 体言止め、倒置法 142
2-3 問いかけ法、呼びかけ法 146
2-4 常体の挿し込み 149
2-5 否定形変換 153
2-6 （ちょっと無理やりな）ます↓です変換、です↓ます変換 155
3. 同じ単語の連続に気をつけよう 159
3-1 ひとつの文に同じ単語を出さないかっこよさ 159

3-2 隣接文に同じ単語を出さないかっこよさ 164
4. 強調表現 168
7章 直してみよう！
理系文章の実践的ブラッシュアップ例 177
1. とあるウェブサービスの説明文 178
2. SNSへの、とある投稿文 194
あとがき 200

1章 文系社会における**理系の境遇**

1. 文系理系の割合から見る現代社会の構造

わたしたち理系の人生には、独特の生きにくさがあります。それは、この社会が文系多数派の社会――すくなくとも、理系少数派の社会であることから来る生きにくさです。

そもそも理系って、割合的にはどれくらいいるのでしょう？

参考までに、政府が統計データを出している学校基本調査から、令和元年度における大学の学科ごとの人数を見て、その割合を出してみます。

どの学科を理系とすべきかという問題もありますが、まずは、『理学』と『工学』を対象にしてみましょう。このふたつはすくなくとも、理系と言っていいはずです。理工系とも呼称しますから、学問の名前からして明らかかなと。

計算すると、割合は全体の約17・6％でした。二割に満たない数です。

どうでしょう、「なかなかすくないな」と思いましたか？　それとも、「こんなもんだよな」でしょうか。

今度は、『理学』と『工学』に『医学・歯学』『薬学』、それから『農学』も加えてみま

す。すると、割合は約26・1％でした。

もちろん、令和元年度における現役の大学生がこんな割合というだけですから、これをそのまま、さまざまな世代のいる日本社会全体の実情として考えていいわけではありません。

ただ、やはりほかの年度においても、データを見る限り、すくなくとも理系の学生は多数派ではなさそうです。

いくつかの面で自分たちとは考え方や文化の違う人たちの方が、自分たちの生きる社会においては多数派である。この結論、感覚的にも一致するところではないでしょうか？ **社会においてわたしたち理系は、なにかとマイノリティの側にあります。**

それがゆえの生きにくさを、あなたも感じたことがあるのではないでしょうか？

2. 理系の生きにくさの実態

ある日、Twitterで、とあるつぶやきがすこし話題になっていました。

「たった一ヶ月でこんなに寒くなった」という旨の言葉に、十月と十一月の気温データが画像で添えられた投稿です。

たしかに、その気温データをパッと見る限り、日本は一ヶ月でずいぶん冷え込んだように思えました。

しかし、よく確認してみると、十月は朝の気温データで、十一月は昼過ぎの気温データ。一方は冷え込む朝で、一方はいちばん暑くなる昼過ぎという、条件をそろえているとは言い難い形での比較でした。

これについて「条件はそろえて論じるべき」という内容の反論がつき、またそれに対して「人の感じ方の話をしているだけ」といった再反論がされ、次第に周りからもいろいろ意見が寄せられる事態に。

件の投稿は、ちょっとした論争の種になっているように見えました。

あの投稿について、正しいとか間違っているとかを、今ここで言いたいのではありません（わたし個人の感覚としては、擁護する気持ちも、物申したい気持ちも、両方わかります）。

気になったのは、ネット上のコメントにも、リアルでの友人たちの感想からも見られた、**苦言を呈す側に対する「これだから理系は空気が読めない」という意見**です。

学術的・科学的な観点から言えば、条件をそろえて比較すべきという方が正しい意見でしょう。そうすれば、より正確にものごとを捉えられますから。

ただ、コミュニケーションという観点においては、**できる限りの正確さを求めることが、絶対的にいつでも正しい……とは限らない**面があります。

ものごとを前に進めるため、きっちり合ってはいない大まかな意見に、一旦はうなずく。理解を得るため、あえて正確さをいくらか削って説明をする。そんなふるまいが、現実の社会では時折求められます。

そして、そういった適度な妥協こそが社会を回す潤滑油である、なんて考えも、この世の中にはあるように思えます。正確さを求める指摘に対し、「空気が読めない」との意見が寄せられたという事実が、ある意味、そういった考えが世にあることを証明しているかもしれません。

そして、正確さとは別のところで、それはそれで正しいのです。人間が完璧に、正確無比に動いたり判断したりできない以上、適度な妥協や許容がなければ、世の中は動きません。

だから、正確さの徹底が、たとえ科学的な態度としては真っ当でも、その場において求められる人間的な正義や都合にはそぐわない——そんなことが、この世では往々にしてあるのです。

……書いていて、嫌な汗が出てきますね！　苦い記憶がフラッシュバックする。

理系として生きていると、「より正しいことを言っているのになんで受け入れてもらえないんだろ？」と頭を悩ませること、たびたびありませんか……？　わたしにはあります。その場で見えている事実を言っただけのつもりが、「どうしてそんな冷たいことを言うんだ」と悲しまれてしまったり、なるべく正確なことを確認したかっただけのつもりが、「お前には情緒がない」と呆れられてしまったり……。

理系（われわれ）はついつい、正確であることを、イコールで正しいことだと考えてしまいます。ゆえに、より正確であることは、より正しいことだとも思ってしまう。

それが間違っていると言いたくはありませんが、それを求めていない場、あるいは人や

文化というものがあるのです。

もし理系がこの世の中で大多数を占めていたのなら、こんなことで悩む必要はあまりなかったでしょう。

しかし悲しいかな、先に述べたとおり、日本社会はそうなっていない。

学問の中で学んできた態度や倫理と、実社会の多くの場面で求められるふるまいが一致していないことは、理系にとって、悲しくもわかっておかなければならない現実です。だから我々は、ちょっとだけ生きにくかったりするのです。

3. 理系の文章と、世の中の意識の、本質的なすれ違い

正確さが評価されない。学んできたものと、現実で求められるものが違う――という話は、文章においても言えることです。文章で記される内容そのものもそうですが、なんと、その書き方においても、です。

これはとても重要なことなのですが、理系界隈で良いとされる文章の書き方と、それ以外の場所で良いとされる文章の書き方は、**かなり別物です。**

そして、「理系には文章力がない」という、世の中に広がる誤った通説の原因は、まさにここにあります。……そう、あえて言い切ってしまいますが、**理系に文章力がないなどという認識は、間違っているのです。**

文章力がないのではありません。ただ、その使い方やタイミングが適切でないだけです。

文章には、大きく分けてふたつの種類があります。

・誤解される可能性を過度に恐れず、まずは一人でも多くの人に理解や共感されることを目指すもの

と、

・たとえ理解できる人が少なくとも、絶対に誰にも誤解されないことを目指すもの

です。

理系の人間は、前者の『理解しやすい文章』ではなく、後者の『誤解しにくい文章』の技術を磨く人種です。

これはどうしてかというと、理系が理系として書く文章の数々においては、誤解されうる曖昧な表現が許されないからです。

ある文章を読んだ人が、

「この文章の結論、みんなは○○だって言ってたけど、俺は△△だって思う。あ、考えようによっては□□って解釈もありだなあ」

なんて言ったとしましょう。

これが小説や詩ならば、なにも問題はありません。人によって受け止め方が違う、個人個人が自由に解釈できるというのは、文学作品の持つとてもたいせつな機能のひとつです。

しかし、科学論文や技術書、手順書であったならどうでしょう。——どう考えても、望まれる事態ではありませんね。Aという薬品とBという薬品、どちらを先に投与すべきかは読者の受け止め方次第！　……なんて論文や手順書、使い物になりません。誤解を起こしうるのなら、有害ですらあります。

理系が理系として書く多くの文章においては、個人個人が自由に解釈できる余地などというものは、残してはいけません。どんな人が読んだとしても、一意にしか受け止められないような言い方を、徹底せねばならないのです。

そういった、誤解しにくい文章を書くには、いくつかのテクニックや大事な心構えがあります。だれもがすぐにできることでは、決してありません。誤解しにくい文章が書ける

というのは、誇るべき立派な文章力です。

でも、じゃあどうして理系は文章力がないと言われているのでしょう？

それは、理系界隈の外側、つまり世間一般における多くの場面では、誤解しにくい文章ではなく、理解しやすい文章の方が評価されるから。

もうすこし言うと、**誤解しにくい文章の技術を、理解しやすい文章が必要なシーンで使ってしまうと、逆効果になるからです**。誤解しにくい文章のための技術と、理解しやすい文章のための技術は、本質的に相反するものなので、文章をどちらか一方に寄せると、もう一方からは離れていくようになっています（このあたりの話については、以降の章で具体的に解説していきます）。

理系の書く誤解しにくい文章は、理解しやすい文章をこそ良しとする世の中の多数派が属する世界では、読みにくい・わかりにくい、イコールで質が低いと言われてしまいます。

だから理系の人間は、世間的に、文章力がないと評価されているのです。

4. 理系界隈にただよう、文章力への諦め

わたしは、中学を卒業してから高専の電気情報工学科に入り、以来、大学院まで理系の世界で育ちました。

その中で得た友人たちの多くは、文章を書くことについて、なんとなくネガティブで自信がなく、「人に見せるのも恥ずかしいから、できることなら避けたい」と考えてすらいるように見えます。

文章をめぐる理系のこんな自意識について、わたしは、大いに問題があると感じています。

理系として過ごしていけば理系としての力が育っていき、誤解しにくい文章を書くスキルも磨かれていきます。

前の節でわたしは、誤解しにくい文章の技術を、理解しやすい文章が必要なシーンで使ってしまうと逆効果になる……と書きました。

文章に対する理系の自意識に悪さをしているのは、主にこの逆効果です。

理系として過ごすと、論文作成などを筆頭に、文章を書く機会がそこそこあります。その度、苦手意識を持ちつつもみんな、自分なりにがんばって文章を書いていくわけです。

書くのは当然、理系として紡ぐべき、誤解しにくい文章。そこで磨かれていくのは、誤解しにくい文章を書くスキル。……そう、（世間一般で評価される）理解しやすい文章とは相反するものを書くスキルです。

大事なことなので、改めてもう一度言います。誤解しにくい文章を書くスキルを、理解しやすい文章が求められるシーンで使うと、逆効果になります。

……なので理系は、**がんばって自分たちなりに文章力を磨けば磨くほど、それを使って自分たちにとって良いものを書けば書くほど、世間一般の方々に文章を読んでもらったときに、「読みにくい」「わかりづらい」と酷評されてしまうようになる**のです。

そうなってくると、「ああ、こんなにがんばって文章を書いても、世間からは悪文とされてしまうってことは、自分には文章を書く才能がないんだなあ」なんて勘違いもしてし

まう。

かくして理系はどんどん、文章を書く自信を、ポロポロと心からこぼしていく。

周りから文章力がないと評価され、自分自身でもそう思い込んでしまうとなると、文章を書くことそのものについて、漠然とした諦めが根づいていきます。

やがて書く機会を避けるようになって、結果、**自他ともに認める『文章の書けない・書かない理系』の出来上がり**です。

わたしは、こんなに悲しいことはないと思っています。

もしこの本をお読みのあなたが、理系で、自分には文章力がないと考えているのならば、その思い込みはどうか、今日この時をもって捨てていただきたいです。

あなたには文章力がないのではありません。自分の磨いてきたそれを、使うタイミングが悪かっただけです。

5. 理系が『理解しやすい文章』を書けるようになると得られる、新しい道

この本は、正確さ重視の『誤解しにくい文章』を書いてきた理系の同類たちに、読みやすさ・わかりやすさ重視の『理解しやすい文章』を書くスキルをお伝えする一冊です。

しかし、理系が理解しやすい文章を書けるようになって、良いことはあるのでしょうか？

わたしは、大いにあると思っています。

昨今、ＳＮＳの興隆にともない、個人個人がなにかを発信する機会がグッと増えました。

その方法は、写真も動画もありますし、描ける人は絵も使うでしょう。

ですが、もっとも普遍的で、詳細に物事を伝えられる手段は、やはりいつの時代も文章です。発表場所が学会などではなくカジュアルなＳＮＳならば、好まれるのは、理解しやすい文章。

仕事においても趣味においても、現代ほど、文章力が誰にとっても役に立つ時代は歴史上なかったと思います。

今こそ、世間的に希少な専門知識や技術を持つ理系が、積極的に、理解しやすい文章のための力を磨いて、自らの価値を高めていくべき時代ではないでしょうか。理系少数派のこの社会でも、文章力をつければ、理系の活躍できるシーンは広がります。

実際問題、理系としてのバックボーンを持ちながら文章も書ける、というスキル構成を持った人は、かなり少ないです。もうそれだけで価値があり、いろいろ仕事を任せていただけます。

わたしは現在、小説を書く傍ら、フリーランスでＩＴ企業とお付き合いし、広報として働いて、オウンドメディアを運営したりプレスリリースを書いたりしています。そういったお仕事をさせていただく際にも、やはり、理系としての専門知識があると、より信頼してもらえます。自分自身も、さまざまな面でやりやすいです。

理工系の知識や、技術を取り扱う人間としての基礎教養があることは、文章書きとしてとても貴重で強い武器です。もちろん逆に、文章書き的なスキルを科学者や技術者が持つことも、同様に強力でしょう。

また、そんな個人個人の生存戦略とは別に、理解しやすい文章を書くスキルを、理系の同胞たちにぜひ身につけてほしい理由がもうひとつあります。

それは、誤った情報が拡散されやすい世の中になっているので、正しい知識を持った上で発信力もある専門家が、ひとりでも多くいてほしいことです。

それらしい言葉で編まれた科学に関する誤情報は、時に人の命を奪います。発信力があり、かつ正しい知識を持った専門家は、それらに対抗できうる社会の安全弁です。

本書では、あしたからでもすぐに使えるような、とにかく簡単に習得できるものに的を絞って技術をご紹介します。ライティングの勉強にそこまで時間は割けないけれど……といった、本業のお忙しい方にもお力になれるかなと。

お役立ていただければ幸いです！

2章 理系の文章、一文が長すぎる問題

1. 一文が長いと理解しにくい

本書で紹介するのは、理解しやすい文章の書き方。それは、理解しにくい文章の直し方と言っても正しいです。

さてこの章では、理解しにくい文章のひとつにして、わたしの思う代表格、**一文が長い文章**の直し方をご紹介していきます。ここでいう一文は、文章が始まってから句点（。）で区切られるまでのひとまとまりを指します。

一文が長い文章というのは、たとえばこんな感じです。

> 我々が提案するのは、画期的な単位の取り方で、これをマスターすることにより、どんな難しい講義でも確実にD判定を避けることができ、勉学の時間を他の活動に充てられ、学生生活がより豊かになること請け合いなので、ぜひ身につけてください。

どうでしょう、『内容が頭にスッと入ってこない感』、すごくないですか？　読むのが疲

れるというか、結局なにを言ってるんだっけ？　と混乱してくるというか。

これは、**一文の長さが原因**です。こう書き換えてみましょう。

> 我々が提案するのは、画期的な単位の取り方。これをマスターすることにより、どんな難しい講義でも確実にD判定を避けることができます。勉学の時間を他の活動に充てられるので、学生生活がより豊かになること請け合いです。ぜひ身につけてください。

グッと読みやすく、意味が飲み込みやすくなったかなと思います（文章の内容自体は、胡散臭くてロクでもないことを言っていますが）。

ところで、どうして一文が長いと読みにくく、そして理解しにくいのでしょうか？

これは、句点で区切られるまでの間は、言葉と言葉が密接につながり合っているからだとわたしは考えています。あるいは、**読む側からすると、密接につながり合っていると仮定して読み進めなければならないから**、とも言い換えられます。

先ほどの例文は、「我々が提案するのは～」というくだりから始まります。以降、文章が句点で一区切り付けられるまで、読者は、読んでいる間中ずっと「我々が提案するのは～」

という文言を、頭の中に置いておかなければなりません。ずっと備えておく必要があります。一文中、つまり句点が置かれるまでは、「我々が提案するのは～」という文言が、どこに係るか決定されないからです。

ほかの文言についても同様です。文が句点で区切られない以上、**一度出てきた文言は、ほかの文言に係る可能性をずっと持ち続けます**。なので、読者はそれをいつでも参照できるよう、頭のいちばん上の方に置いておかなければならない。

そして、文が長くなればなるほど、その置いておかなければならない文言が、どんどん積み上げられていきます。読んでいて疲れますし、最悪の場合、最初の方に出てきた文言を掘り出せなくなって、文章の意味が読みとれなくなります。

これが、一文が長い文章の、理解しにくさの正体です。読む側の脳に、高い負荷をかけてしまうわけですね。

2. どうして理系は一文が長い文章を書いてしまうのか

前節で挙げた例文は、わかりやすいように大げさに書きはしましたが、正直、あれくらいのものなら割とよく見ます。理系界隈において、そんなにめずらしいものではありません。

論文でも技術書でも、技術者のみで構成されるＩＴベンチャーのコーポレートサイトでもよく見ます（ＩＴ企業で広報をやっている関係上、ちょくちょくそういったサイトに訪れる機会があります）。または、スマホアプリのストア紹介文や、アプリ内説明文なんかでもありがちですね。開発者の方が書かれているんだろうな、なんて感じます。

なんならわたしも、デビュー当時、担当編集さんに「ここ、一文がちょっと長いです」と何度も指摘されました。苦い思い出で、ありがたいご指導でした。

一文が長い文章を、理系はかなり書きがちなのです。

これはどうしてかというと、やはり、**誤解しにくい文章を書こうという気持ちがある**

からです。表現の不正確さを嫌っているのです。

句点で切らずにズラズラっと続ける一文中においては、先に述べたとおり、言葉は密接につながり合います。長くなると、読むのに負担はかかります。しかし、きちんと読み込むことができた場合は、どこの言葉とどこの言葉が係っているのか、誤解しないような作りにはなるのです。

対し、文章を切ると、代名詞（彼や彼女、これ、それ、あれなどなど）で切れ目をつなぐことになったりします。問題はここにあって、**代名詞がなにを指しているか、もしかしたら読み手は誤解するかもしれない**のです。それは、事実を正確に伝えることを至上命題とする技術系の文書において、致命的です。

なので、なるべく一文を切らずに続けてしまう。それが理系（われわれ）の本能であり、培ってきた倫理だからです。

今しがた記された文章で例をあげましょう。

> 代名詞がなにを指しているか、もしかしたら読み手は誤解するかもしれないのです。それは、事実を正確に伝えることを至上命題とする技術系の文書において、致命的です。

この文章の『それ』は、直前の文章の『読み手が誤解するかもしれない』ことを指しますが、違う読み方をされてしまう可能性もゼロではありませんよね。

そんな感じの問題、国語のテストでやりませんでしたか？　文章中の『それ』とはなにを指しているか、答えなさい……みたいな。

テストで問題になるということは、間違う人間がいるということです。

一方で、

> 代名詞がなにを指しているか、もしかしたら読み手は誤解するかもしれないことは、事実を正確に伝えることを至上命題とする技術系の文書において、致命的です。

なんて風に書くと、誤解の可能性は防げます。基本的に、理系の文章においてはこうやって一文が長くなっていきます。

しかしどうでしょう、やはり、誤読しにくくなった分、代わりにグッと読みにくくなったと思いませんか？　理解しやすさが目減りしました。

もっと違った表現をするなら、なんかクドくないですか？

この「なんかクドイ」という言葉、かつて私は何度も何度も言われてきました。そのたび、「正確に書いているのに、なんで文句言われなくちゃいけないんだ」と内心憤慨していました。

しかしこれは、的外れな怒りです。

代名詞を排除し、一文を長くして誤読を防ぐのは、誤解しにくい文章のためのテクニック。理解しやすい文章が求められているシーンで使うべきではないのです。

自分が書きたい文章と、求められている文章が食い違っていないか、都度都度、確認していかなければいけません。

3. 長い文章かどうか判断するための目安

さて、先ほどから『一文が長い文章』という文言を何度も使っていますが、具体的に、長いとはどんな状態を指すのでしょう？　長いかどうか、**定量的に見分けるやり方があれば素敵**ですね。理系（われわれ）向きです。

結論から言うと、あります。それは、読点の数を目安にすることです。

読点とは、『、』のことです。

そもそもわたしは、文章の理解しやすさを語るとき、この読点こそをもっとも重要視しています。目安の前に、すこしその話をさせてください。

読点を適切に打つと、文章は非常に読みやすくなります。読みやすさというのは、文章の理解しやすさにおける、とても大きな要素です。

さて、読みやすいかどうかは、流し読みできるかどうかでわたしは判断しています。力を入れて「よし、読むぞ！」と意気込まずとも、適当な気持ちでパラパラと眺めただ

けで、大まかな意味が頭に入ってくる。そんな文章であれば、読みやすいと言っていいはずだと考えているからです（なお、もちろんこれは、その文章が魅力的かどうかとは別問題です）。

では、こんな小さな『、』のあるなしで、そんなに読みやすさ＝流し読みのしやすさって変わるものでしょうか？　試しに例文を見てみましょう。

私は最近キン肉マンにとてもハマっておりあれはすばらしい物語なのでそろそろ義務教育に追加されるべきだと思っている。

どうでしょうか？　流し読みできましたか？

無理だったと思います。一文字ずつていねいに追っていかないと、先の例文は読めません。

どうしてかと言えば、もちろん、読点を使っていないからです。使ったバージョンはこちら。

私は最近、キン肉マンにとてもハマっており、あれはすばらしい物語なので、そろそろ義務教育に追加されるべきだと思っている。

こうであれば、さっきよりスラスラ読めますね。

適切に打たれた読点は、文章の読みやすさを跳ね上げてくれます。書き手にとって、とても心強い存在です。

そして、**読点の使い方を覚えると、今度は句点も上手に打てるようになってきます。**「セオリーに従って打っているのに、ちょっとこの文、読点が多いな。じゃあ、そろそろどこかで句点を打って文を切らなくちゃいけないんだな」とわかるようになるからです。

先ほどの例文で言えば、

私は最近、キン肉マンにとてもハマっている。あれはすばらしい物語なので、そろそろ義務教育に追加されるべきだと思っている。

とすると、より読みやすくなりますね。

一文が長くなってしまっていないか、長くなってしまっているならどこで切るべきか。それが、自分で判断できるようになる。読点の使い方を覚えることで、そんな素敵な能力が得られます。

一文にどれくらいの読点があると多いのか、ということの具体的な目安については、この章の最後に記します（どうして今すぐに書かないのかと言うと、読点を打つルールを知らずに数の目安だけ知っても、意味がないからです）。

4. 今こそ学ぼう、読点の使い方

読点には、「ここに打つといい」と言ったセオリーが存在します。この本では、その中から9つをピックアップしてご紹介します。セオリーの中でも比較的覚えやすく、そして効果の高いものたちです。

もちろん、**これらはあくまでセオリーであって、絶対的な正解ではない**です。理解しやすい文章を書く上において、これらに従って編むと、読者のニーズに合ったものが出来上がりやすいという話です。

それでは、さっそくいってみましょう！

4-1 セオリーその1：要因と結果の間に打つ

次の例文、あなたならどこに読点を打ちますか？

例
普段から勉強をサボっていたので私は単位を落としてしまった。

どうでしょう？　あまり迷わないかなと思います。
セオリーではどうか見てみましょう、こちらになります。

例
普段から勉強をサボっていたので、私は単位を落としてしまった。

大切なのは、どうしてここに打ったか説明できるようになることです。どうしてここに打つべきなのでしょう？
答えは、**ここが要因と結果の間だから**です。
『普段から勉強をサボっていたので』が、要因。『私は単位を落としてしまった』が、結果ですね。
というわけで、

●セオリーその1：要因と結果の間に打つ

です。

数ある読点の中でもぜひ最優先で打ってほしいくらい、非常に重要なセオリーになります。

空白に近い見た目を活かし、文中の要素を視覚的に分ける――これは、読点の持つとても強力な効果のひとつです。

デザインの分野には、関係性の強いものは近づけて配置する、弱いものは遠ざけて配置する、という近接の原則があります。このセオリーその1の読点は、まさにそれを行っています。

要因の部分と結果の部分の間に距離を作って、相対的に要因同士、結果同士がまとまって見えるようにしているわけです。

文章において、要因と結果の組み合わせで出来ている構造は、典型的であり、よく出てきます。なので、そのふたつを視覚的に切り分ける読点の使い方をマスターするのは、とてもオススメです。

さて、要因と一口に言っても、細かく分ければいくつかの種類があります。
具体的には、

- 理由、原因
- 状況
- 仮定
- 条件、前提

などなどです。
ほかの教本ではこれらを『要因』とはくくらず、ひとつひとつ別の読点の使い方として説明することが多いようです。しかし、それでは覚えるのが大変なので、わたしは『要因』という考え方でくくってしまうことをオススメします。
では、具体例をあげてどんどん見ていきましょう！　それぞれ、どこに読点を打つかぜひぜひ考えてみてください！

例

〈理由、原因〉
普段から勉強をサボっていたのでわたしは単位を落としてしまった。
〈状況〉
落とした単位を探しに行くと過酷な世界が待っていた。
〈仮定〉
すべての単位を落としたときぼくは無に還る。
〈条件、前提〉
きちんと勉強するならばやがて単位は戻るだろう。

セオリーを使用するとこんな感じになります。

例

〈理由、原因〉
普段から勉強をサボっていたので、わたしは単位を落としてしまった。
〈状況〉

落とした単位を探しに行くと、過酷な世界が待っていた。
〈仮定〉
すべての単位を落としたとき、ぼくは無に還る。
〈条件、前提〉
きちんと勉強するならば、やがて単位は戻るだろう。

また、〈理由、原因〉の亜種として、逆接の後ろにも同じように読点を打ちます。

例
普段から勉強をサボっていたが、ふしぎと単位はやってきた。

みたいな感じですね。

4-2 セオリーその2：長くなった主語の後ろに打つ

次なるセオリーにいきましょう。例文をご覧ください、どこに読点を打ちますか？

例 テスト前もがんばらなかったわたしは単位を落としてしまった。

打てましたか？　セオリー適用後を見てみましょう。

例 テスト前もがんばらなかったわたしは、単位を落としてしまった。

となります。これは、

・セオリーその2：長くなった主語の後ろに打つ

です。

こうする一番の理由は、どこまでが主語なのかをはっきりさせるためです。主語が長くなってしまっても、最後に読点を入れれば、「ここまでが主語です」と示せます。

さらに、読点には前後の単語を目立たせる効果もあります。ささっと流し読みしていた

だければわかると思うのですが、**文章の中で目立つのは文頭と文末、そして読点の前後**です。

主語が長くなった状態で読点を打たずにいると、主語における『ぼく』や『わたし』といった核となる単語が、文中に埋もれてしまいます。読者からすると、見つけるのがむずかしくなります。

なので、『ぼく』や『わたし』の直後に読点を打ち、見つけやすくしてあげると良いのです。

ただ、このセオリーその2を使うにおいては、注意点があります。それは、**セオリーその1が適用できるのであれば、必ずそれを打ってから使うこと**です。

例：読点なし

普段から勉強をサボっていたのでテスト前もがんばらないわたしは単位を落としてしまった。

この例文には、セオリーその1とセオリーその2の両方を使えます。こうなりますね。

例：**セオリーその1＋セオリーその2**

普段から勉強をサボっていたので、テスト前もがんばらないわたしは、単位を落としてしまった。

ずいぶん読みやすくなったかと思います。しかし、ここでセオリーその2だけ使ってしまうと、

例：**セオリーその2だけ**

普段から勉強をサボっていたのでテスト前もがんばらないわたしは、単位を落としてしまった。

こうなってしまいます。これはかなり読みにくいです。主語が異様な長さになって見えてしまいます。

ぜひ、ちょっと気をつけてみてください。基本的に、セオリーその1は他のどの読点よりも優先して打っていただいて良いかと思います。

4-3 セオリーその3：述語と離れている主語の後ろに打つ

次です。どこに打つでしょうか？

例 猫は向こうにある四角いテーブルの上に跳び乗った。

ちょっと迷うかもしれませんね。これは、ここに打ちます。

例 猫は、向こうにある四角いテーブルの上に跳び乗った。

どうしてここに打ったのでしょうか？　セオリーとして確認してみましょう。

今回は、

- **セオリーその3**：述語と離れている主語の後ろに打つ

となります。

理屈としては、セオリー2と同じようなものです。読点を打つことで、主語がどこからどこまでなのかはっきりさせています。

主語とそれが直接かかる述語（この場合は『猫』に対する『跳び乗った』）の間にたくさんの要素があると、パッと見てどこまでが主語だかわかりにくくなります。

そうなると、一文字一文字をしっかり読む必要が出てきて、流し読みができなくなるわけです。

だから、主語の直後に読点を打ち、文を区切ってわかりやすくすると効果的です。

4-4 セオリーその4：長くなった目的語の後ろに打つ

セオリーその4にいきましょう。これは、またちょっとややこしいかもしれません。

例

あまりにも辛いカレーライスの味にわたしは文句を言った。

どこに打つか決められたでしょうか？　セオリーを使うと、このようになります。

例

あまりにも辛いカレーライスの味に、わたしは文句を言った。

主語が長い文ではないことに注意してください。「あまりにも辛いカレーライスの味にわたしは」が主語なのではなく、あくまで「わたしは」だけが主語です。
そのため、

- **セオリーその2**：長くなった主語の後ろに打つ

の使用タイミングではありません。
この文に適したセオリーは、

- **セオリーその4**：長くなった目的語の後ろに打つ

となります。

目的語とは何かというと、「○○を」「○○に」における○○部分を指します。例えば「服を着る」「裸になる」では、それぞれ服と裸が目的語です。

これもやはり、どうして読みやすくなるかの理屈はセオリーその2、3と似ていて、どこまでが目的語なのかはっきりするからです。

では、セオリーその3で出てきたこちらの文章は、どう考えたらいいでしょうか。

例

猫は向こうにある四角いテーブルの上に跳び乗った。

ここでは、「向こうにある四角いテーブルの上」が目的語になっています。

であれば、

例：**セオリーその4使用**

猫は向こうにある四角いテーブルの上に、跳び乗った。

とするべきでしょうか？　でもこの文章、読みやすいですか？

わりと読みにくいかと思います。やはりこれは、

例：セオリーその3使用

猫は、向こうにある四角いテーブルの上に跳び乗った。

とするのがベストです。セオリーその3とセオリーその4であれば、3の方が優先度は高い……いえ、正直かなりケースバイケースなので、ちょっと断言は難しいかも。

例：セオリーその3＋セオリーその4

猫は、向こうにある四角いテーブルの上に、跳び乗った。

これはどうでしょう？　ここまでていねいに読点を入れるのは、ちょっと好みが分かれそうですね。わたしは少々くどいかなと感じます。

この例でわかるのは、使用できるセオリーをすべて使用すれば良いわけではないことです。セオリーを使えるようになったら、今度はどれを優先して使うべきかで悩むようになるのです。**そして出した答えが、書き手の文体を作っていきます。**

一時的には、文章を書くスピードは落ちるでしょう。ですが、悩めば悩むほど、文章力は確実に上がっていきます。ぜひ、大いに悩んでみてください。

余談になって恐縮ですが、わたしはそうやって悩む時間が大好きです。

4-5 セオリーその5：述語と離れている目的語の後ろに打つ

さて、セオリー5つ目ですが、実はセオリーその2〜4から予想ができます。

- セオリーその2：長くなった主語の後ろに打つ
- セオリーその3：述語と離れている主語の後ろに打つ
- セオリーその4：長くなった目的語の後ろに打つ

パターン見えるでしょうか？　こうなります。

- セオリーその5：述語と離れている目的語の後ろに打つ

では、例文をあげてみましょう。

例

学校に仲良くなったかわいい転校生と行く。

という文章であれば、

例

学校に、仲良くなったかわいい転校生と行く。

となります。

「学校に」と「行く」の間が離れていて、どこまでが目的語かパッと見ではわからなくなってしまうので、読点を打ってわかりやすくしています。セオリーその3と同じですね。

なお、これはちょっと悪文ではあります。例としてあげるためにわざと作りましたが、本来は、

例

仲良くなったかわいい転校生と、学校に行く。

という語順にすべきかもしれませんね。

でも、文章を組んでいると、都合上どうしても語順をいじれないときもあります。

たとえば、関係者が多く、すこしいじるだけで各所と調整をしなければならないようなテキストは、それに当てはまるでしょう。わたしの仕事で言えば、他社と協業して挙げた成果をご紹介するプレスリリースなんかでは、文の構成を大きくいじるのは大変だったりします。

次善策として、せめて読点ですこしでも読みやすくする手段を手札に持っておけると、これでなかなか心強いです。

4-6 セオリーその6〜9を一挙紹介！

6番目まできました。

残り4つはとても簡単なので、一気に紹介してしまいます！

●セオリーその6：並列要素の間に打つ

例：**単語の場合**

国語、数学、理科、社会、英語、そしてキン肉マンだ。

例：**短い文の場合**

力が強く、体も大きく、メンタルもタフ。

・セオリーその7：時間を表す言葉の後ろに打つ

例

- 近年、悪魔超人の株が上がっている。
- 最近、都は騒がしい。
- 6月12日、ついに発売！

・セオリーその8：独立語の後ろに打つ

なお、独立語とは、文中のほかの言葉から独立し、それ単体で意味を持つ言葉を指します。と、言われてもよくわからないですよね。わたしもこの説明だけだと「?」です。例を見るのが早いかと思います。

例
- もしもし、お電話代わりました。
- はい、承りました。

この場合、「もしもし」や「はい」が独立語です。

セオリーその9：接続詞の後ろに打つ

例
そして、時は動き出す。

4-7 ここまでのおさらい

おさらいしましょう。

- セオリーその1：要因と結果の間に打つ
- セオリーその2：長くなった主語の後ろに打つ
- セオリーその3：述語と離れている主語の後ろに打つ
- セオリーその4：長くなった目的語の後ろに打つ
- セオリーその5：述語と離れている目的語の後ろに打つ
- セオリーその6：並列要素の間に打つ
- セオリーその7：時間を表す言葉の後ろに打つ
- セオリーその8：独立語の後ろに打つ
- セオリーその9：接続詞の後ろに打つ

以上が9つのセオリーです。

読点の打ち方の中でも重要で、かつ身につけるのが簡単なものを選びました。ぜひぜひ

使ってみてください。

それから、大事なことがもうひとつ。

考えて読点を打つようになると、その文章が読みやすくなるだけでなく、文章力自体が上がります！

なぜなら、読点を打つために「この文章、どこまでが主語になってるかな」などと考えるようになれば、文章の構造を捉える力が自然と鍛えられるからです。

そういった意味でも、読点についてきちんと学ぶことは、とても意味があるのです。

4-8 表現のための読点：読点一個で印象がここまで変わる！

読点の打ち方というのは、本当に奥が深い話です。今回紹介した、基本となる9つのセオリー以外にも、さまざまな技術があります。

ぜひ、「なんかこの文章好きだなあ」というものを探して、そこで使われている読点の打ち方を参考にして、いろいろ試してみてください。

今回の9つのセオリーは、どれも読みやすさ、つまり『理解しやすさ』のためのものでしたが、**表現のための読点**というのも存在します。

例
美しい夜のことだった。

こういった文があったとします。あっさりした、普通の文ですね。これをもっとキャッチーにしたい、印象の強い文章にしたいと思ったとき、

例
美しい、夜のことだった。

こんな風にするのはどうでしょう?
一拍ためて、より力を入れて気持ちを籠めて、心から本当に美しいと思って言っているような感じになったと思いませんか? 読点たった一つだけで。
読点は、さまざまな力を持つとても重要なツールです。

4-9 一文に読点4個は『長すぎる文章』

最後に、一文中に入る読点の数について、その目安をご紹介します。

ここに来るまでで、基本的な読点の使い方をもう学習してくださったので、以下の表が使えるようになります。

0個：短めの文章。
1個：普通の文章。
2個：長めの文章。
3個：長い文章。句点で区切れないか検討してみる。
4個：長すぎる文章。ダメではないけれど、なるべく句点で区切りたい。

注）並列要素を区切る読点（セオリー6）に関しては、何個あっても1つとカウント

4個がラインです。これはわたし個人の感覚でもそうですが、もの書きの界限全体でも、おおむね同じラインを採用している方が多いように思います。

その証拠に、文賢という校閲ツール（文章の誤りなどを機械的にチェックしてくれるツール）では、一文中に4個以上の読点を打っている文章に対して、やはり警告が出ます。付記してあるとおり、4個を超えたら絶対にダメ、というわけではありません。実際、本書の中でも、読点4個の文はいくつかあります。

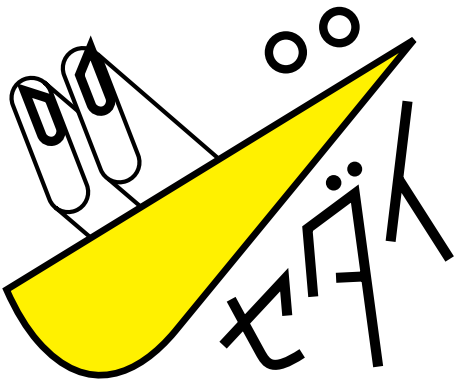
長いのは間違いないので、長い文章を書いているという自覚を持って、それを良しとすべきかどうかをちゃんと判断することが大切です。

先に紹介した、表現のための読点などの例外はありますが、読点は基本的に『要素のまとまり』と『要素のまとまり』の間に入ります。

なので、読点が多すぎるというのは、一文中にたくさんの要素を詰め込みすぎていることを示します。だから、読点の数を目安にして、多すぎる場合は一旦どこかで文を切ると効果的です。

理系の書く文が持つ、『一文が長い』という特徴。誤解しにくい文章を書くときには良いのですが、理解しやすい文章には不向きです。

この章で得たテクニックを使って、ぜひ調整してみてください！



君は、セダイ

何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント
著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研
若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み
既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!